山形県埋蔵文化財調査報告書　第48集

山形県教育委員会

北田遺跡

山形県教育委員会
山形県埋蔵文化財緊急調査団
1981

業務用

北田（きただ）遺跡

発掘調査報告書

1981年3月

北田（きただ）遺跡

発掘調査報告書

1981年3月

序

国指定の史跡として、出羽国古代の国府に擬定されている「城輪柵遺跡」、また古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」などをふくむ酒田市東部の水田地帯は、埋蔵文化財の宝庫であります。城輪柵の南に位置する東平田地区も古くから土器類や柱根が出土する地として知られ、国府に関連する遺跡が存在するとの推測もなされてきました。

この度、東平田地区の境興野、北田、関Bの三つの遺跡が、本年度施工予定の県営ほ場整備の事業区域内にふくまれることになったので関係各機関と協議の結果、文化財保護法により事前に緊急発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存をはかることになりました。発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、5月17日より開始して8月29日で三遺跡の調査を予定通り完了いたしました。

調査の結果、平安時代の一般庶民の集落跡があらわれ、東北古代史の研究上、貴重な資料を提供することができました。本報告書は、記録保存の一環としてその成果を述べたものであります。

調査にあたって種々御配慮と御協力をいただいた最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会、地元の関、境興野の部落長をはじめ地元の多くの方々、また現地において御指導、御助言いただいた柏倉亮吉山形大学名誉教授、新野直吉秋田大学教授に、記して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和56年3月　　山形県教育委員会

教育長　**大竹　正治**

例　　言

1．本書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した県営ほ場整備に伴なう北田遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和55年７月２日から同年８月27日まで行った。

3．本書の作成は、川崎利夫、野尻　侃、安部　実が担当執筆した。

4．実測図等の作成においては中村敬三、佐藤正子、水落みち子、石井　節の協力を得た。

5．編集・写真撮影は安部　実が担当した。

調　査　体　制

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　山形県教育庁　庄内教育事務所埋蔵文化財分室

川崎利夫（主　査）　野尻　侃・安部　実（技　師）

調査協力　最上川右岸土地改良事務所　日向川土地改良区　酒田市教育委員会

事務局　主　幹　小嶋茂太（庄内教育事務所長兼埋蔵文化財分室長）

主幹補佐　佐藤良一（同　次長）

事務局員　大須賀芳夫（同　総務課長）　菅原　猛（同　総務主査）

吉村庄子

目　　次

Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至る経過 …… 1

2．調査の概要 …… 1

Ⅱ　遺跡の概要

1．立地と環境 …… 3

2．遺跡の層序 …… 4

Ⅲ　遺構と遺物

1．遺　構 …… 6

2．遺　物 …… 6

Ⅳ　ま と め …… 12

挿　　図

第１図　遺跡位置図

第２図　グリッド配置図

第３図　土 層 図

第４図　遺構平面図

第５図　ＳＫ１土壙跡・ＳＢ６建物跡

第６図　出土土器

第７図　出土土器 ― 墨書土器

第８図　北田・関Ｂ遺跡遺構平面図

第９図　北田・関Ｂ遺跡試掘壙内
　　遺物出土状況

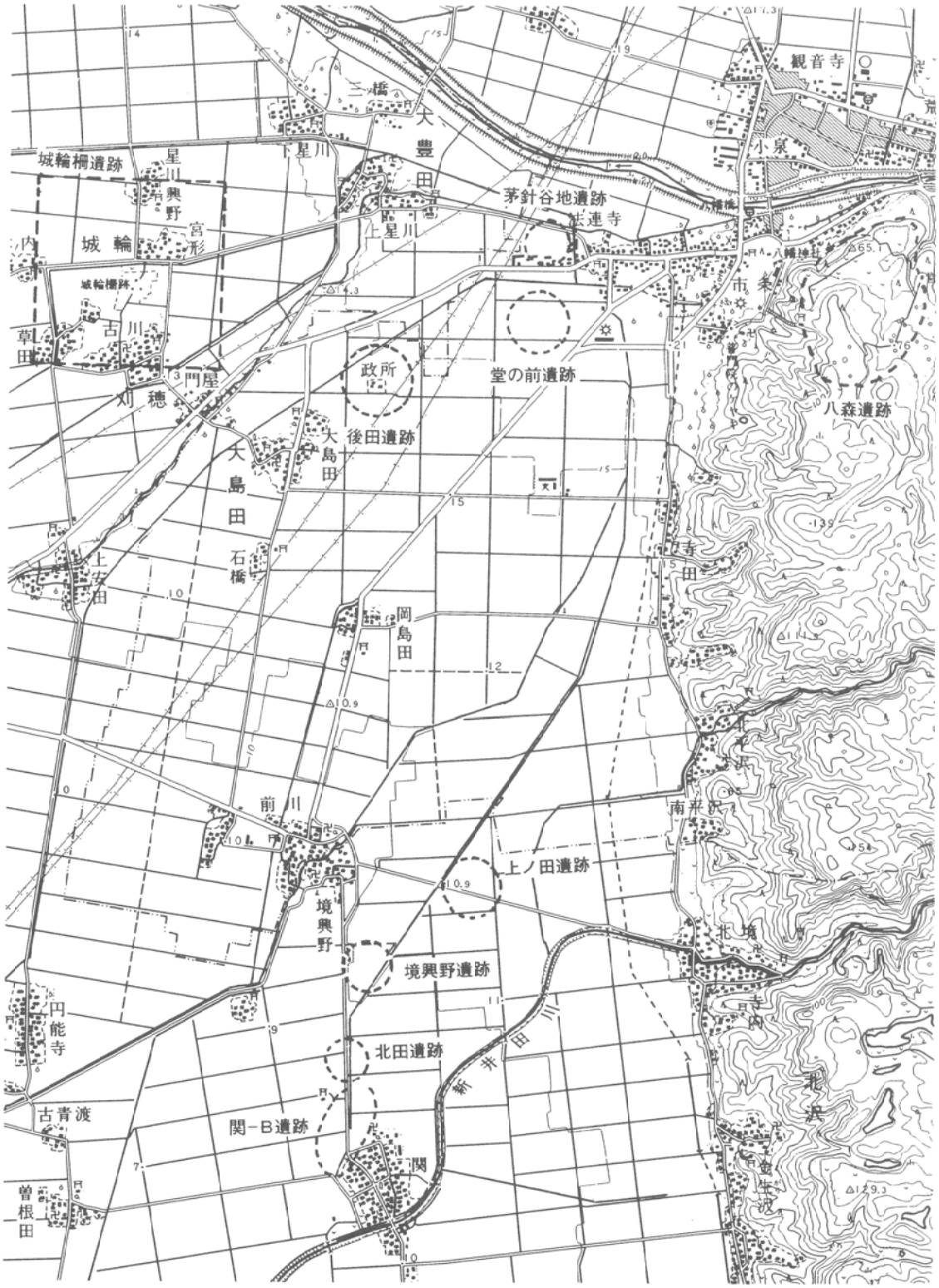
図　　版

図版１　遺跡遠景・精査区近景

図版２　ＳＢ６建物跡・ＳＫ１土壙跡

図版３　出土土器 ― 須恵器

図版４　墨書土器



1:25,000　羽後観音寺

第1図　遺跡位置図

500m　0　500　1000　1500

Ⅰ 調 査 の 経 緯

1．調査に至る経過

酒田市の東部水田地帯に位置する境興野、北田、関Ｂの３遺跡は、地元の伊藤安記氏によってはやくから注目され、昭和38年版の「山形県遺跡地名表」にも登載されている。それによれば、須恵器や井戸跡などが発見されている遺跡である。昭和52年の「山形県遺跡地図」にも、佐藤禎宏氏の調査により平安時代の集落跡として記載されている。

これらの遺跡が、昭和55年度施工の県営ほ場整備事業の予定区域に入ることになったので、前年より関係各機関と協議を行ってきた。そして遺跡の範囲や性格、年代、遺物や遺構の包含層を確認するため、昭和54年10月17日より19日まで庄内教育事務所埋蔵文化財調査室(旧称)において試掘を含む事前調査を実施した。

それらの結果にもとづき、更に協議を重ねて昭和55年度に山形県教育委員会が主体となって緊急調査を行うことになった。そして昭和55年４月25日に、地元関係者、工事主体の最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会、調査主体の県教委など東平田公民館に参集して打合せ会を開いた。それによって発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、５月12日から８月末日まで３遺跡の緊急調査を実施することとなったのである。

2．調査の概要

本遺跡は関Ｂ遺跡と隣り合せのため、同時に調査を進めた。調査は７月２日から８月27日までの延36日間である。北田遺跡に関する調査の経過は以下の通りである。

７月２日～９日

遺構・遺物の集中区域を探る試掘作業。

７月10日～18日

試掘作業で判明した遺構・遺物の集中区域は調査区南辺寄りに存在する。精査区は１単位を３m四方とするグリッドに基づき150～161―164～167グリッドと決定する。重機により表土はぎを行う。

７月23日～８月１日

面整理作業。土壙１、ピット13、２間×２間の掘立柱建物跡１棟を検出。

８月４日～７日

遺構掘り下げ。掘立柱建物跡柱穴の掘り下げ、土壙土層断面測図、５日には境興野遺跡で「県民参加の発掘」を行う。

８月18日～27日

遺構の写真撮影、平面図実測作業。26日は現地説明会を関Ｂ遺跡と同時に行い、27日にはすべての調査を終了した。

第2図　グリッド配置図

Ⅱ　遺跡の概要

1．立地と環境

北田遺跡は、酒田市大字関字北田に所在する。酒田市街の東6.3km、関集落の北の境興野にいたる水田中にあり、標高は10m前後である。その1.5km東は出羽丘陵の山麓にあたる。従って、庄内平野の北西部に位置することになろう。

関より境興野に至る幹線農道に沿って約1kmの間に、北より境興野、北田、関Bの3遺跡がつらなっている。北田遺跡はその中間を占め、幹線農道の東西に遺跡は広がるが西側には都波岐神社と諏訪神社がある。都波岐神社は、いま諏訪神社に合祀されて水田中にわずかにその痕跡を残すにすぎないが、諏訪神社は延長年間（923～931年）に信濃より勧請したと伝えられる古社である。林に囲まれたなかに立派な社殿が建ち、広い社地を有している。

これらの遺跡群より北北西2.2kmのところには、平安時代における出羽国の行政の中枢である国府に擬定される城輪柵遺跡の南側外郭線がある。本遺跡群も、城輪柵が国府としての機能を果していた時期に形成されたものであり、何らかの関連を有することは想像にかたくない。

いま庄内北部の穀倉地帯として美田が広がる荒瀬川左岸の城輪柵遺跡を中心とした酒田市東部から八幡町にかけては、平安時代の官衙跡や集落跡が数多くみられる。城輪柵より東の八幡町にかけて、国分寺に擬せられるむきもある堂の前遺跡、さらに出羽丘陵の段丘上にある八森遺跡は「三代実録」仁和3年（887年）の条により一時的に移転した出羽国庁という説もある。

本遺跡群の北東にある上ノ田遺跡は、官衙跡と思われる掘立柱建物跡や井戸などの遺構とともに多量の墨書土器が発見された。さらに南側の関と横代の中間には、喜田貞吉博士によって出羽国分尼寺に比定されたことがある高阿弥陀遺跡がある。大槻新田から手蔵田にかけては墨書土器を含む多量の土器が出土しており、円柱根なども発見されており古代の公的施設が存在した可能性がある。

東方の出羽丘陵の一部をなす低丘陵地帯には、これらの遺跡に須恵器を供給した窯跡群が多数分布しており、泉谷地、願瀬などは一部調査が行われている。中世には鷹尾山修験の栄えたところで、山麓の生石延命寺を中心に南北朝時代の自然石塔婆（板碑）が多くみられる。また、このあたりには朝日山城をはじめ中世の館跡も多く、まさに平安時代から中世にかけての遺跡の宝庫でもあり、その再検討がまたれるところである。

2．遺跡の層序

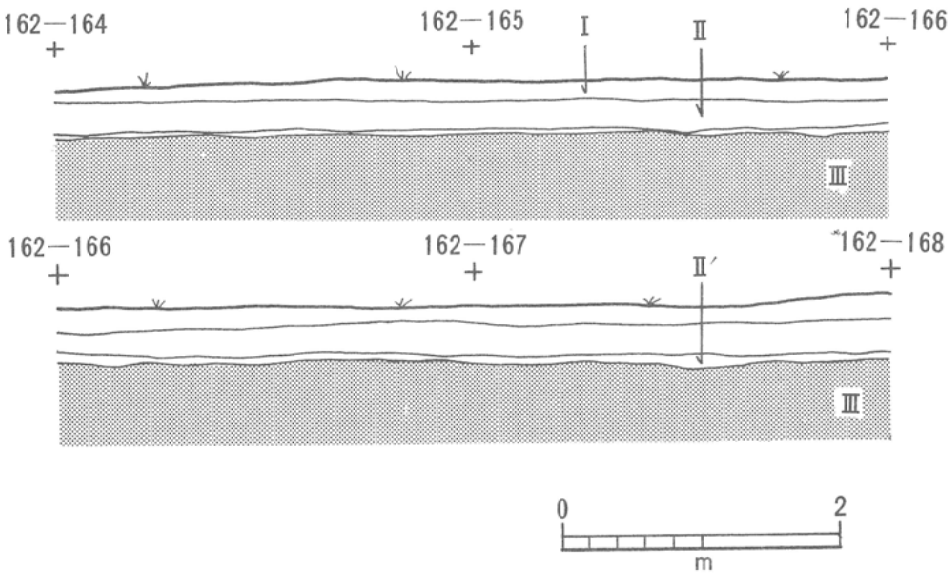
本遺跡の東方1.5kmに出羽丘陵がある。そこから源を発する小河川が沖積平地を作り、西流するに従い低くなっている。本遺跡も東側がわずかに高く西側へ傾斜しているが、一見平坦である。土層観察による遺跡を覆う土層は以下の通りである。

第Ⅰ層　明茶褐色微砂質土　稲カブの根が入り込み、やや粘性をもつ耕作土である。厚さ15～20cmを測る。

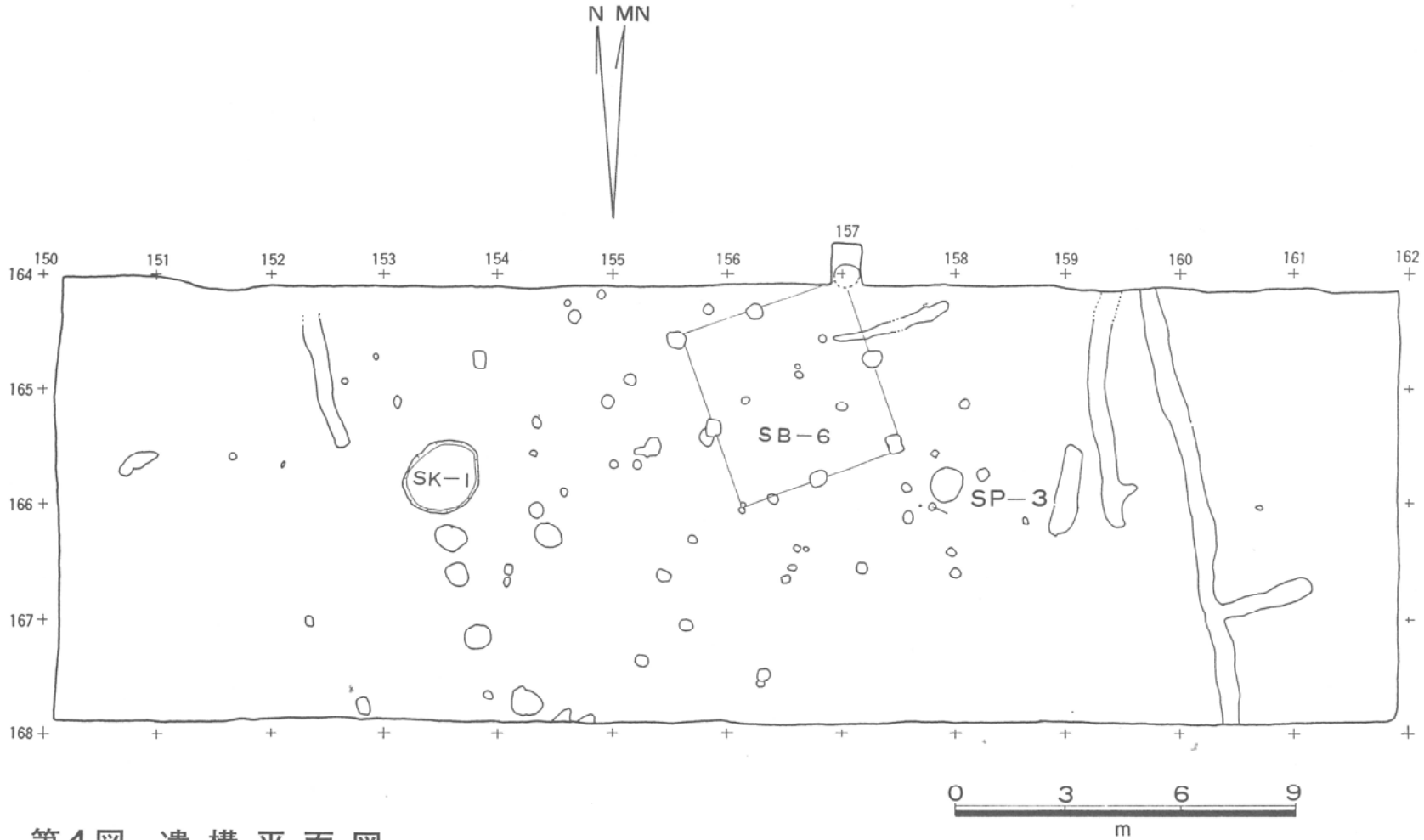
第Ⅱ層　暗褐色微砂質土　炭化粒子を含み、堅くしまっている。土器片を包含し、厚さ20～25cmを測る。

第Ⅱ'層　第Ⅱ層の漸移層　Ⅱ層より暗い色調を呈し、炭化物を多量に含み堅い土質である。厚さ５～10cmを測る。

第Ⅲ層　青灰色シルト　全体的に青灰色を呈し、所により粗砂層が表われている。地山層である。



第3図　土 層 図


N MN
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
164
165
166
167
168
SK－1
SB－6
SP－3
0
3
6
9
m

第4図　遺構平面図

Ⅲ 遺構と遺物

1．遺　構

発見された遺構は掘立柱建物跡１、土壙跡１、溝跡４、ピット61である。精査区のほぼ中央北寄りに掘立柱建物跡を、それより西側６ｍのところに土壙を検出した。ピットは土壙や掘立柱建物跡の周辺に集中して確認された。溝跡は、これらの遺構をはさむように東へ３条、西へ１条検出された。なお、本文・挿図中におけるＳＢは掘立柱建物跡、ＥＢは掘り方、ＳＫは土壙跡、ＳＰはピットを表わす記号である。また挿図中の方位は真北である。

ＳＢ６掘立柱建物跡

155～157—164・165グリッドⅢ層上面で確認。ＥＢ７～14の柱で構成される２間×２間の建物跡である。柱間距離は北側柱列で８尺等間であるが、他の側柱列は７尺の柱間である。そのため柱穴は北へ、やや開いた形で検出された。柱穴の掘り方は径約20～30㎝の隅丸方形や円形を呈したもので、深さ20～30㎝を測る。ＥＢ13からは須恵器坏の墨書土器が出土した(第７図・**16**)。

ＳＫ１土壙跡

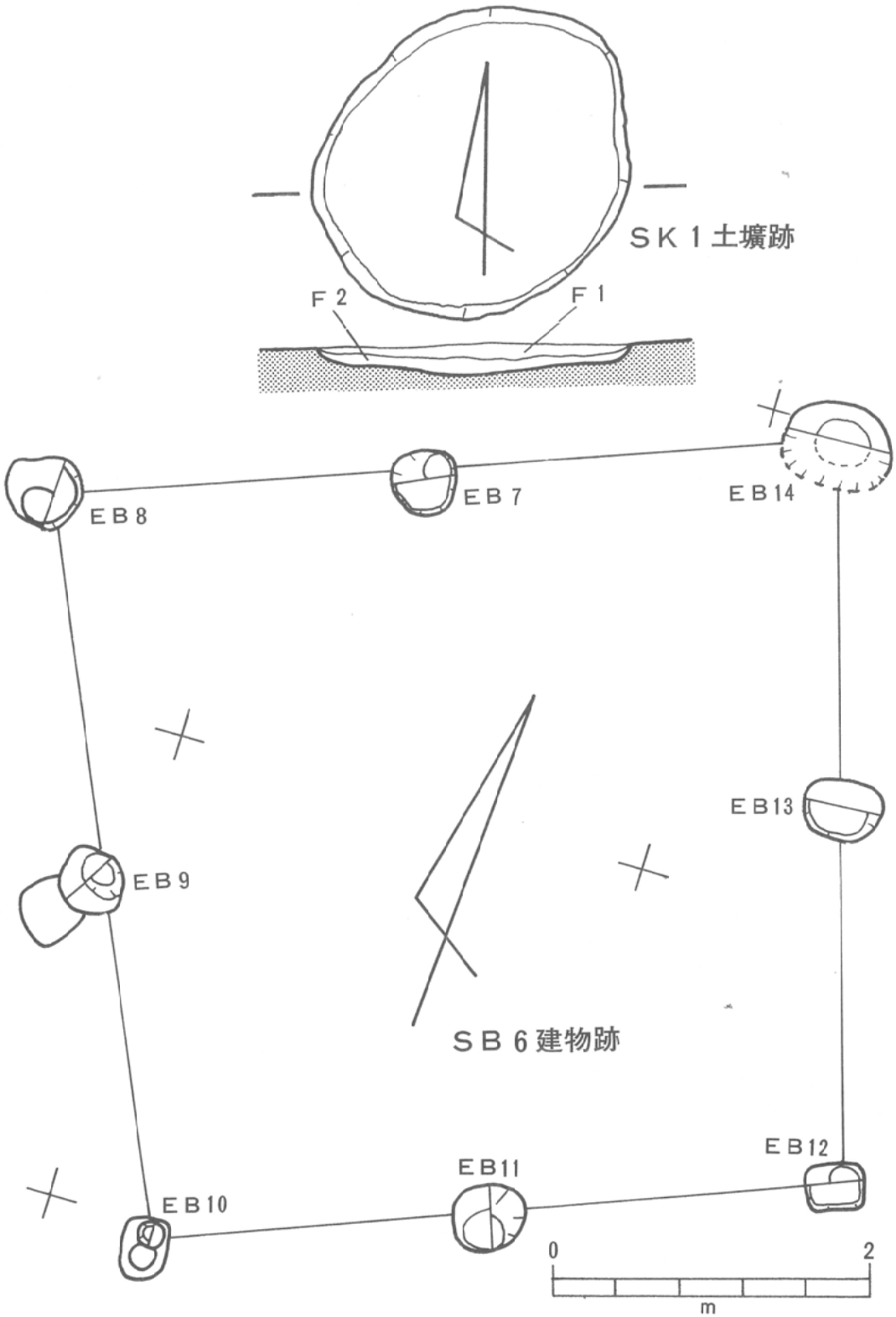
153—165グリッドⅢ層上面で検出。長径215㎝、短径180㎝の、やや楕円を呈する。深さは20㎝を測り、皿状の土壙跡である。覆土は２層に分かれ、１層は暗青灰色シルトに青灰色シルト及び灰が混り、炭化物を含む。２層は暗褐色シルトと炭化物、灰がまだらに混り、２層共に粘性がある。須恵器片の中には２点の墨書土器があり(第７図**14**・**25**)、**14**はＳＰ３出土の土器片と接合されたものである。

その他61のピットが検出されたが、建物跡等を構成する配列にはならなかった。

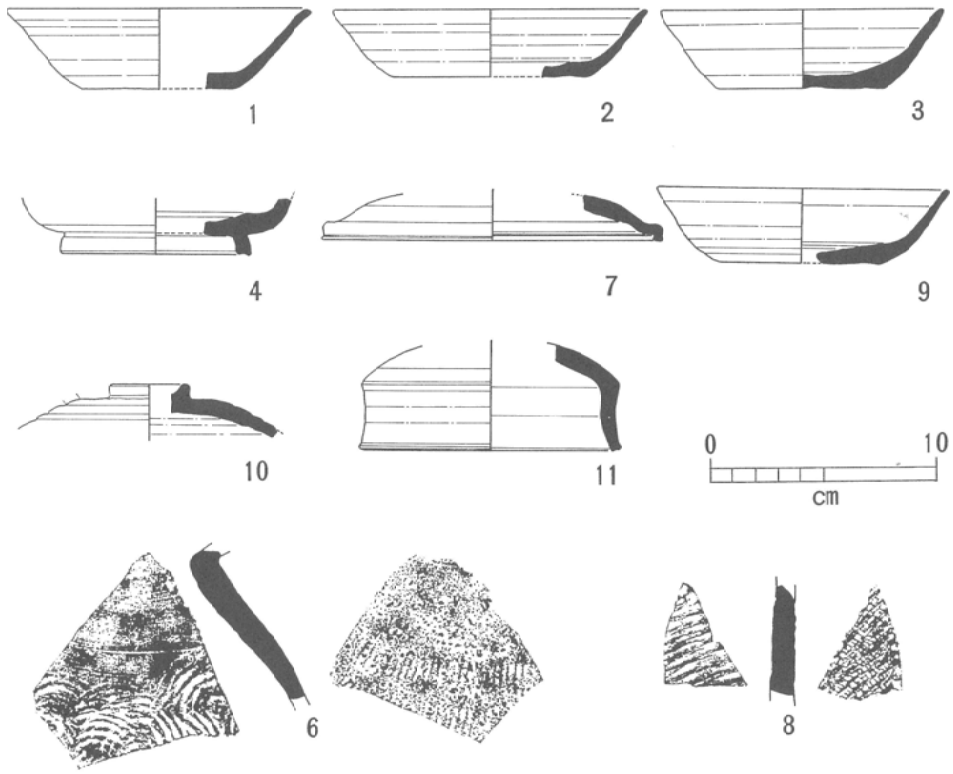
2．遺　物

本遺跡出土の遺物は、須恵器、赤焼土器、内黒土器、陶磁器であり、すべて破片で完形のものはない。実測図は図上復元によるものである。陶磁器は、すべて後世の流れ込みによる混入である。破片数3,551点中、須恵器50.4%、赤焼土器47.4%、内黒土器１%であるから須恵器と赤焼土器が主体であり、それに内面黒色処理を施し、土師器の技法を踏襲した内黒土器の坏が僅かに認められる。

須恵器は坏がもっとも多く、それに高台坏、蓋、椀、薬壺状の小形の坩などの小形のものから、甕、壺、長頸壺、鉢などが認められる。やや大形の甕や壺には、須恵器特有の条線間に細かい短小の条が入る叩き目、格子目状の叩き目を施し、内面に同心円、または青海波、浅くてやや巾広い条線で叩いた叩きしめの痕跡を残すものが多い。中形の壺や長頸



第５図　ＳＫ１土壙跡・ＳＢ６建物跡



第6図　出土土器

○須　恵　器

遺物番号	器形	計測値(㎜) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法	出土地点・層	備考
1	坏	134	68	36	赤褐色	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロナデ	SK1・覆土	
2	坏	140	87	30	暗灰色	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロナデ	SK1・覆土	
3	坏	126	74	35	灰　色	粗砂混	良	ヘラ切	ロクロナデ	SK1・覆土	輪積痕
4	高台坏	—	80	—	暗青灰	粗砂混	良		ヘラケズリ	SK1・覆土	
7	蓋	150	—	—	灰　色	粗砂混	良			SP3・覆土	
9	坏	129	70	32	灰　色	良	良	ヘラ切	ロクロナデ	EB12・覆土	
10	蓋	—	—	—	灰　色	良	良		ヘラケズリ	EB8・覆土	
11	蓋	120			暗灰色	粗砂混	良		ヘラケズリ	EB13・覆土	
6	甕				暗灰色	良	良			SK1・覆土	
8	甕				暗灰色	良	良			SP5・覆土	

壺は無文のものが多く認められ、底部に近い部分は篦削り調整がうかがわれる。

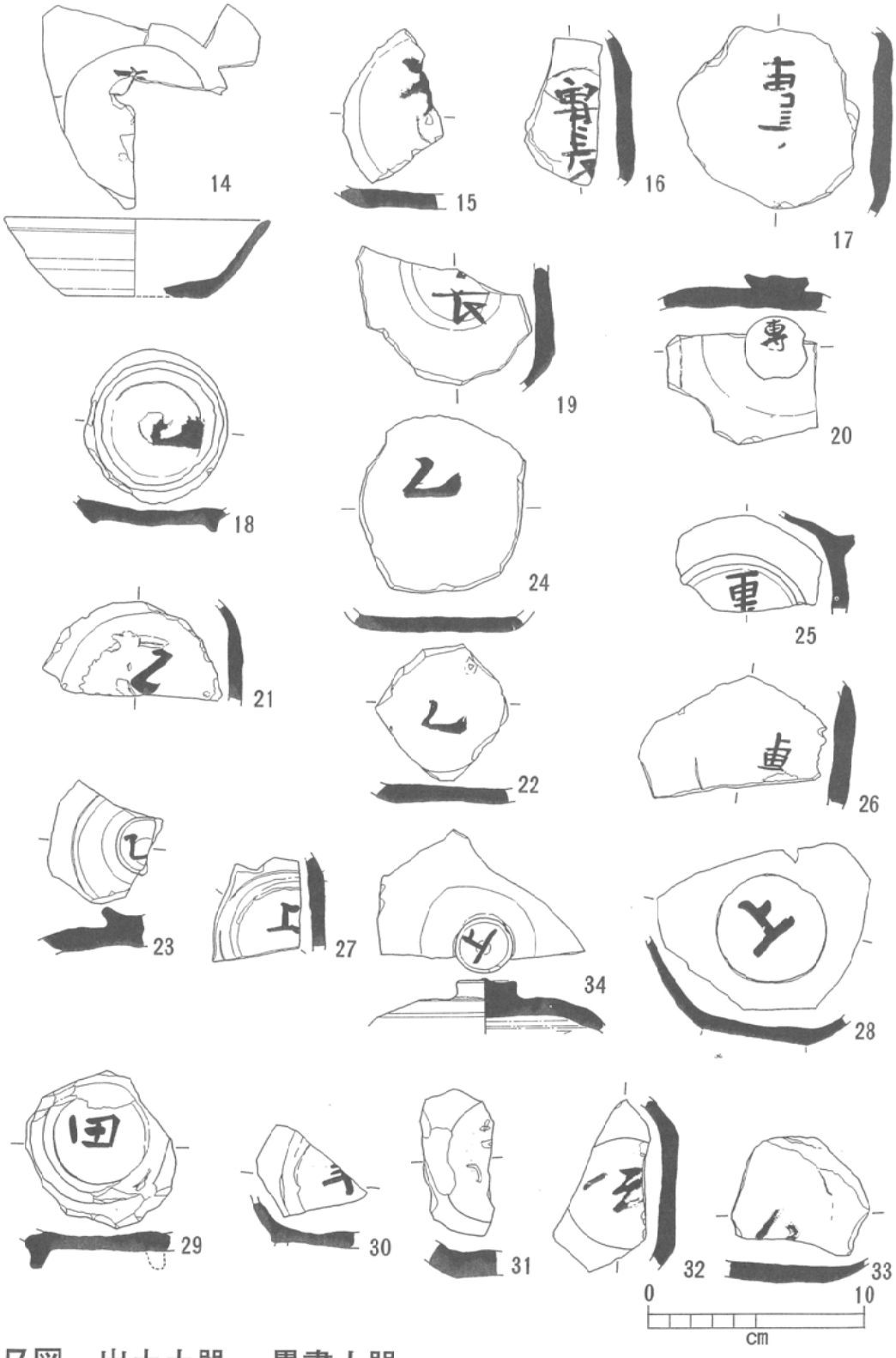
もっともよく特色を把握できるのは坏であり、底部の切り離しが篦切りによるものと糸切りによるものとがあり、前者が主体を占める。それらは口径12cmより13cm、高さ3cmより3.5cm程度のものが多く、口径に対する高さの割合は0.25より0.28で低く、底の広いのが特徴である。底部と体部の境界が稜をもって明瞭に区別されるものもあるが、不明瞭なものと二様あり、体部は外傾しながら起ち上がり口縁部で外反するものもある(第6図**1**)。なかに須恵坏にセットされる蓋とみられるものが出土している。身受けの部分が深く、天井部には回転篦削りが施されている(第6図**11**)。

糸切り痕を有する杯もあるが、底部は比較的小である。高台は、おおむね付高台で割と背が高く爪の張ったものが多い(第6図**4**)。蓋は中がくぼむ小円板状のものを鈕みとし、天井部は回転篦削りがなされている(第6図**10**)。須恵器のなかには、焼きがあまく軟質で灰白色を呈するものや酸化焔焼成によるものもあり、小破片の場合、赤焼土器との区別が困難なものもある。

赤焼土器は概して細片が多いが、坏がもっとも多く、それに高台坏、口縁部が「く」の字状に屈曲し口唇が上方へ起ち上がり、口唇内面が蓋受け状を呈する甕の類、さらに鍋の破片などもある。すべて酸化焔焼成で、赤褐色を呈するものが多い。坏にあっては底部の切り離しが糸切りであり、再調整はほとんど行われていないのが普通である。体部には、ろくろ目の著しいものが多い。技法は須恵器的であり、焼成は土師器的であるこのような土器を赤焼土器と呼称している。いわゆる「須恵系土器」は、この中に含まれる。

本遺跡からは、21点の墨書土器が出土している(第7図)。これらについては一括表示したが、すべて須恵器を用いており墨書部位は底部が多く、墨書するために意識的に打ち欠いていると思われるものがかなり多い(表中・備考◎印)。文字は「□長」・「乙」・「上」・「田」などが認められる。「上」や「田」などは比較的類例が多い。地名、人名、吉祥句の一部を示したものが多いといわれるが、特に文字のまわりを意識的に打ち欠いているものなど呪符的なものも多かったのではないかと思われる。出土場所は一箇所に集中している状態ではなく、遺跡全般より出土している。

土器中、須恵器の占める割合が高く、篦切りの坏が主体を占めていることは平安時代でも古い様相を呈している。しかしながら糸切りの坏も若干混じることは、9世紀の半ば前後から10世紀の前半に至るまでの時間的経過があったことを思わせる。



第7図　出土土器―墨書土器

遺物番号	器形	器種	色調	胎土	焼成	切り離し技法	墨書部位	出土地点	備考
14	坏	須恵器	明灰色	良	良	ヘラ切	底部	SK－1 SP－3 －1	
15	坏	須恵器	青灰色	粗砂混	良	ヘラ切	底部	151—165 Ⅲ	◎
16	坏	須恵器	明灰色	良	良	回転糸切	底部	EB－13	〔霊ヵ〕長
17	坏	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切	内面	XO－34	◎〔霊長ヵ〕
18	高台坏	須恵器	青灰色	良	良	ヘラ切	底部	151—165 Ⅲ	◎
19	坏	須恵器	淡黄色	良	良	ヘラ切	内面	153—165 Ⅲ	◎ □長
20	蓋	須恵器	暗灰色	良	良		鈕	159—164 Ⅲ	専
21	坏	須恵器	明灰色	良	良	ヘラ切	底部	160—166 Ⅲ	◎
22	坏	須恵器	暗赤褐色	良	良	回転糸切	底部	158—166 Ⅲ	◎
23	蓋	須恵器	青灰色	良	良		鈕	159—166 Ⅲ	◎
24	坏	須恵器	青灰色	良	良	ヘラ切	内面	159—165 Ⅲ	◎
25	高台坏	須恵器	暗青灰	良	良		底部	SK－1－1	
26	坏	須恵器	灰白色	良	良	ヘラ切	底部	150—164 Ⅲ	◎
27	高台坏	須恵器	暗青灰	良	良	回転糸切	底部	XO－44	上
28	坏	須恵器	暗青灰	良	良	回転糸切	底部	XO－52	上
29	高台坏	須恵器	暗赤褐色	良	良	回転糸切	底部	XO－49	◎ 田
30	高台坏	須恵器	暗青灰	良	良		底部	XO	
31	壺 ?	須恵器	灰色	良	良	回転糸切	底部	160—166 Ⅲ	
32	坏	須恵器	暗青灰	良	良	回転糸切	底部	158—167 Ⅲ	
33	坏	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切	底部	153—164 Ⅲ	
34	蓋	須恵器	灰色	良	良		鈕	XO－39	転用硯・上

※ XO印は試掘壙

○北田遺跡出土土器片点数表

	赤焼土器	黒色土器	須恵器	陶磁器	計
試掘壙	811	15	582	26	1,434
精査区内	796	21	1,125	9	1,951
遺構内	79	2	85	0	166
総計 (%)	1,686 (47.4)	37 (1)	1,792 (50.4)	35 (0.9)	3,551

Ⅳ まとめ

北田遺跡の南には関Ｂ遺跡がある。試掘調査では、遺物の散布状態が両遺跡精査区付近に集中していた。遺構の性格や出土遺物を検討してみるに、同一の集落跡であると考えられる。

発見された遺構は２間×２間の掘立柱建物跡と土壙がある。建物は比較的細い柱で構成される小さなもので、一般庶民のものと考えられる。土壙は建物跡に付随するもので、ゴミ捨て穴と考えられる。建物跡の柱穴掘り方から須恵器、赤焼土器が出土しており、このうちＥＢ13より墨書土器が出土している。ＳＫ１土壙跡内からは須恵器、赤焼土器が出土し、このうちＳＰ３出土の墨書土器と接合されるものがあった。

出土遺物は須恵器の坏・蓋・甕、赤焼土器の坏・甕、黒面黒色処理の高台坏などがある。出土土器の割り合いが須恵器51％、赤焼土器48％を占めることや、ヘラ切りの坏などが多い事から、その時期は９世紀中葉から10世紀前葉の時期と考えられる(註１)。これらの土器は日常雑器としての機能を果すもので、平安時代の集落に一般的に出土するものである。

本遺跡は「城輪柵跡」の南方2.2㎞に在り、周辺には平安時代の官衙跡や古代集落跡が存在するものであるが、これらは「城輪柵跡」を中心とした強力な国家の規制による計画的な地割によるものと考えられる面もある(註２)。また56年度事業のための事前調査を55年秋に行った際、本遺跡は道路を隔てた「諏訪神社」の周辺にも広がることが確認された。この「諏訪神社」は延長年間(923～930年)に信濃より勧請されたことが伝えられており、これが事実とすれば本遺跡・関Ｂ遺跡と関連する神社であった可能性がある。これに伴なった移住民の集落であるとも考えられる(註３)。

〔註〕

註１　佐藤庄一　「山形県における平安時代の土器様相」『庄内考古学』　第16号、1980年
　　本遺跡出土の坏形土器が報文中Ⅱ Ａ－５ Ｃ類に類似しているようである。
　　佐藤禎宏・佐藤潤子　「酒田市願瀬山第四号窯跡」『山形史学研究』　第７号、1971年

註２　伊藤博幸　「胆沢城と古代村落－自然村落と計画村落－」『日本史研究』　第215号
　　川崎利夫　「城輪柵周辺の諸遺跡」『羽陽文化』　第112号

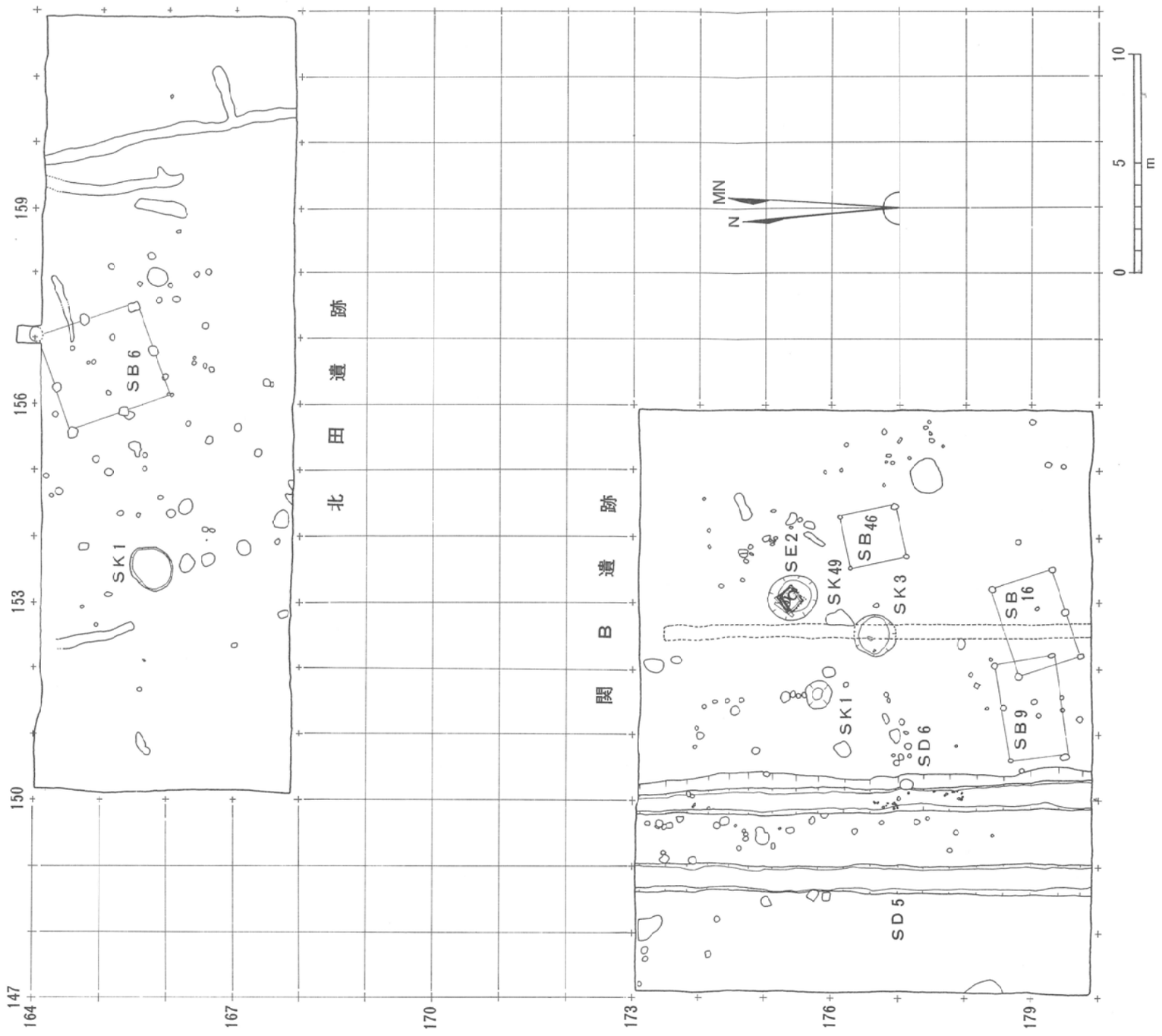
註３　前出　川崎論文

掘調査では、遺物の散布状態が両遺跡精査区付近を検討してみるに、同一の集落跡であると考えら

建物跡と土壙がある。建物は比較的細い柱で構成考えられる。土壙は建物跡に付随するもので、ゴり方から須恵器、赤焼土器が出土しており、この、ＳＫ１土壙跡内からは須恵器、赤焼土器が出土含されるものがあった。

:器の坏・甕、黒面黒色処理の高台坏などがある。土器48%を占めることや、ヘラ切りの坏などが多世紀前葉の時期と考えられる(註１)。これらの土、平安時代の集落に一般的に出土するものである。り、周辺には平安時代の官衙跡や古代集落跡が存跡」を中心とした強力な国家の規制による計画的な:2)。また56年度事業のための事前調査を55年秋訪神社」の周辺にも広がることが確認された。こに信濃より勧請されたことが伝えられており、こ連する神社であった可能性がある。これに伴なっ:3)。

の土器様相」『庄内考古学』 第16号、1980年
段文中Ⅱ Ａ－５ Ｃ類に類似しているようである。
第四号窯跡」『山形史学研究』 第７号、1971年
村落と計画村落－」『日本史研究』 第215号
羽陽文化』 第112号



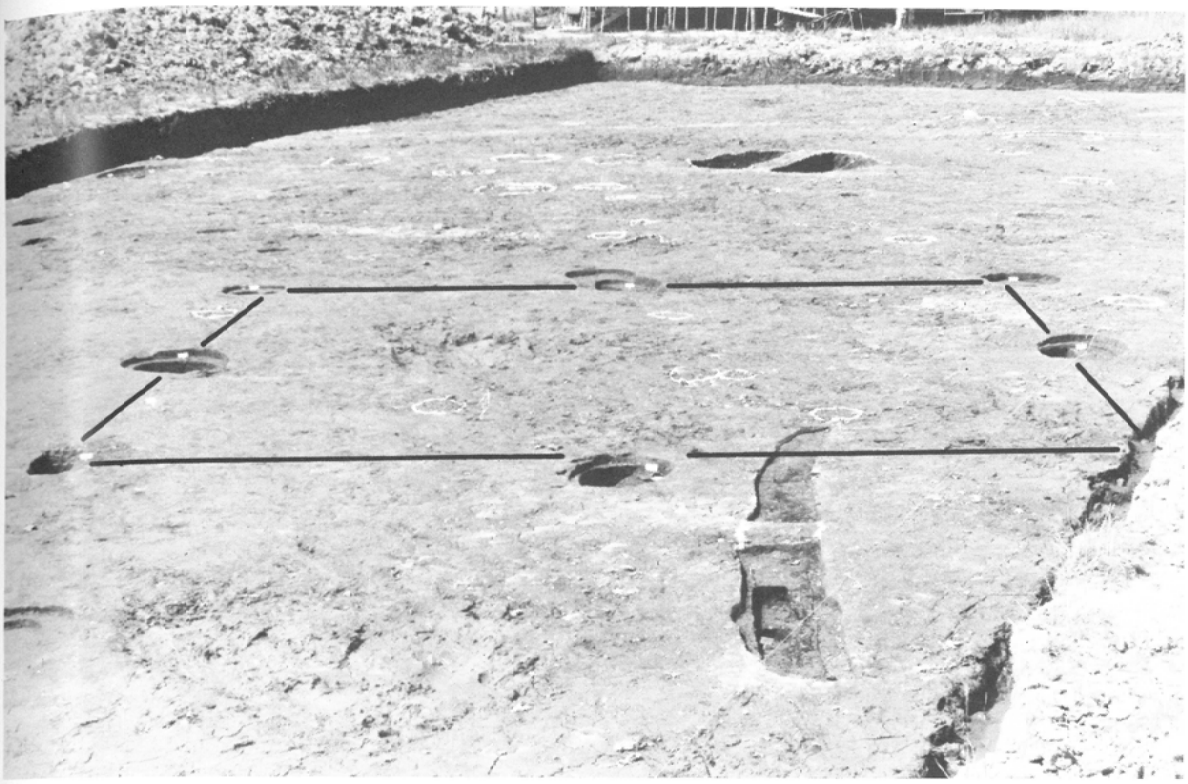
第８図　北田・関Ｂ遺跡遺構平面図

図　　版

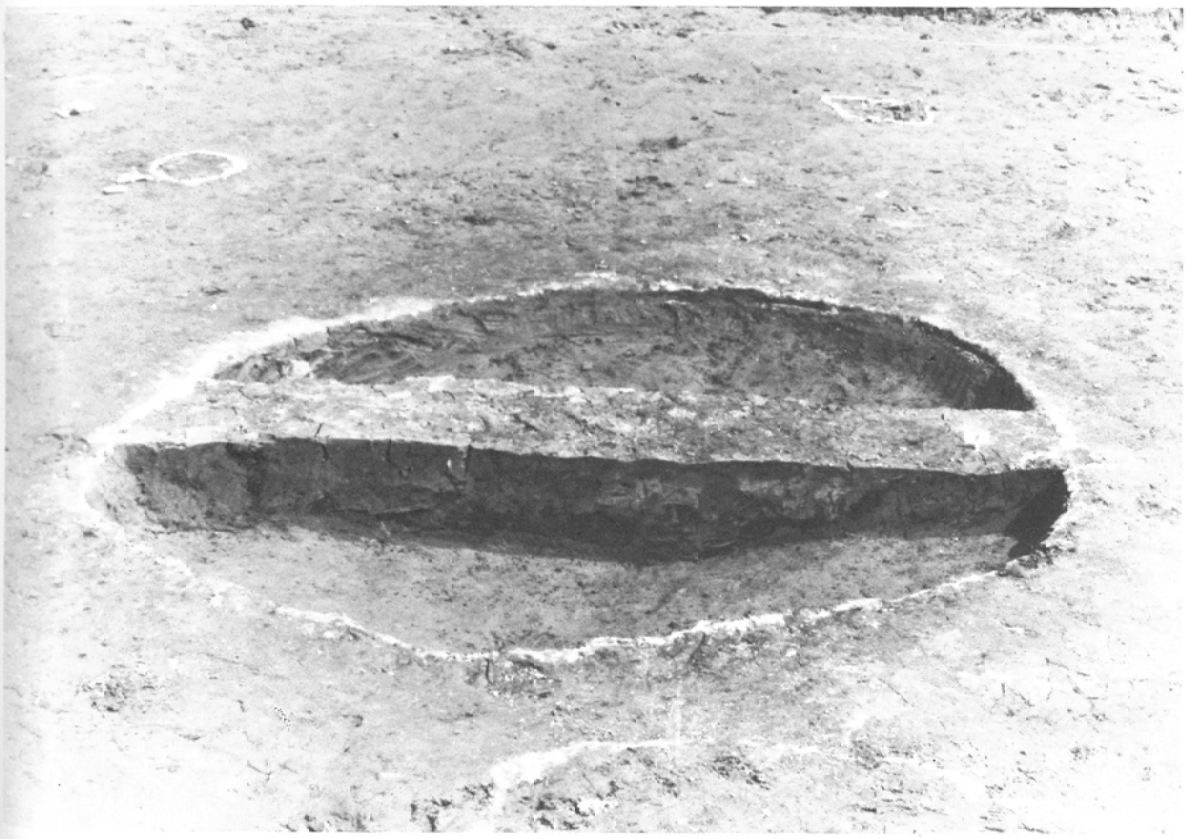
図版1

遺跡遠景（東より）

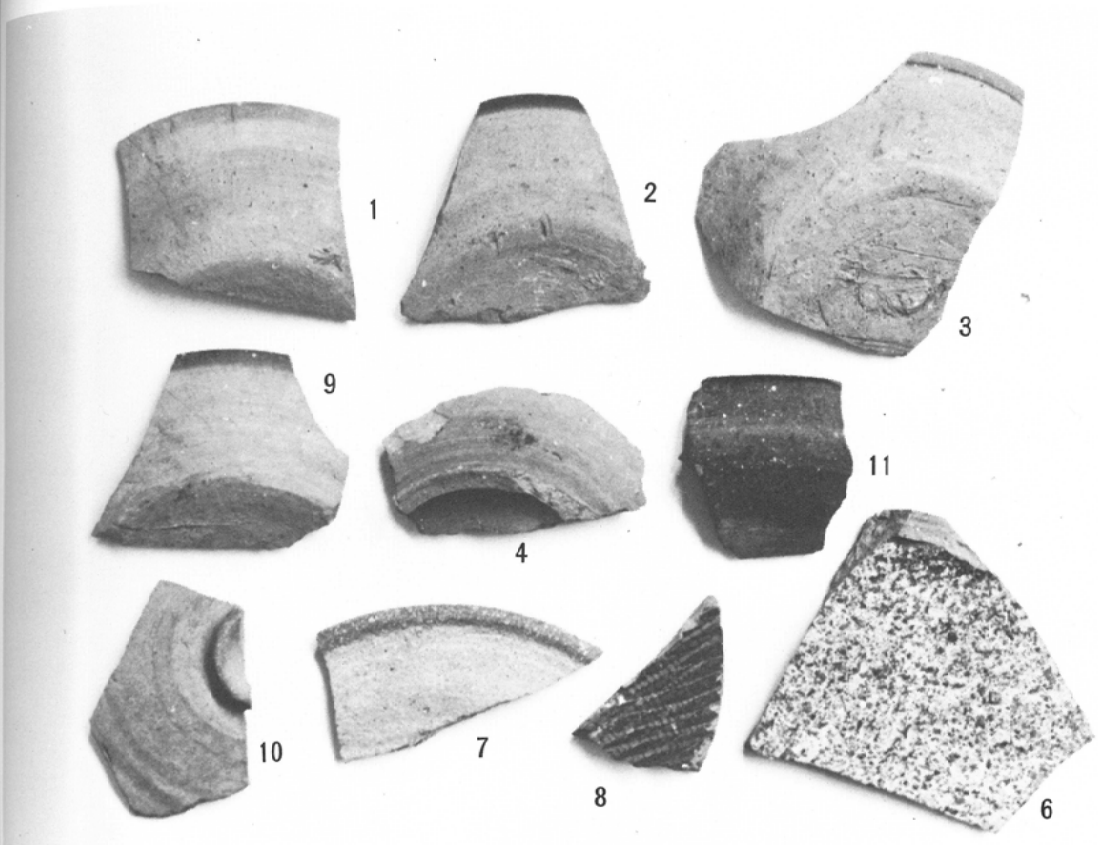
精査区近景（西より）



ＳＢ６建 物 跡（北東より）



ＳＫＩ土 壙 跡（南より）



(外)

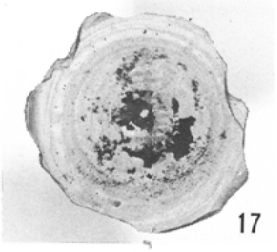
(内)

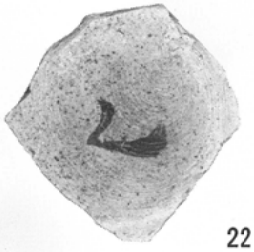
出土土器—須恵器

14

15

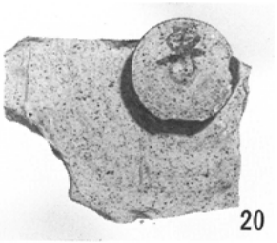
16


17

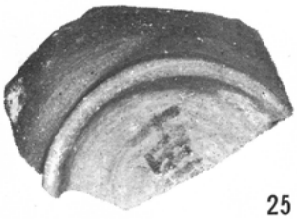

22

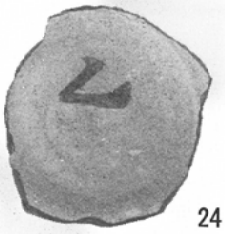
18

34

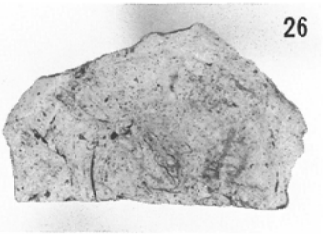

20

21


25

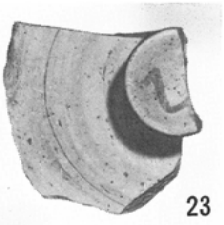

24

19


26

27

29


23

28

30

31

32

33

墨書土器

山形県埋蔵文化財調査報告書　第48集

北田（きただ）遺跡
発掘調査報告書

昭和56年3月23日　印刷
昭和56年3月31日　発行

発行　山形県教育委員会
印刷　鶴岡印刷株式会社
鶴岡市山王町14-24 ☎22-3080㈹